

D-4 乳幼児健全育成のための諸要因の分析的な研究 (その1) 家庭における食保育のしつけ

東京学芸大教育 宇賀神カ 井上義朗 広島大教育 瀬之ロミ 山形大教育 長岡 佑 富崎大教育 秋子 昭和家政 原囁子
お茶の水家政 津真 日本大家政 宇川和子 札幌大教育 西本脩 博女大家政 羽野子 東洋大家政 島田俊孝 川貞子

目的 乳幼児健全育成のために重要な食に関する保育および家庭の保育機能に関し、家政学、心理学、児童学などの諸領域から総合的に検討を試み、乳幼児育成のための理論的、実践的方策を樹立する基礎的研究を目的とした。第I報では食保育のしつけについて報告する。

方法 上述の2領域について2班を編成した。各々の領域に関する調査項目を検討し、統計33項目(共通項目5, 子どもの食保育に関する項目18, 家庭の保育機能に関する項目10)からなる質問紙を作成した。これを3~6歳の幼児をもつ母親782人(九州地区175, 中国地区105, 東京地区371, 山形地区131)について, 昭和47年11月下旬から12月中旬にかけて調査を行った。集計にあたっては各項集計後, 項目間の関係を検討した。

結果 母親の年齢は30~34歳までが最も多く48.3%。家事に専念している者と何らかの形で職業に従事している者とはほぼ同数である。学丁は新制高校・旧女学校卒が多く49.1%で、家族構成は核家族が76.9%と多い。独立家屋に住む者は63.3%で、子どもは遊び場に恵まれている。

食保育のしつけ面についてみると①食物の好き嫌いについての親の態度としては、積極的になおそうと努め、理由は体に悪いからが70%も占め、その方法は調理法をくふうするが多い。②多くの母親は食事のしつけをしていて、年齢が高いほど、学丁の高いほどきびしい傾向がある。食前の手洗、挨拶、姿勢のしつけが高率であった。